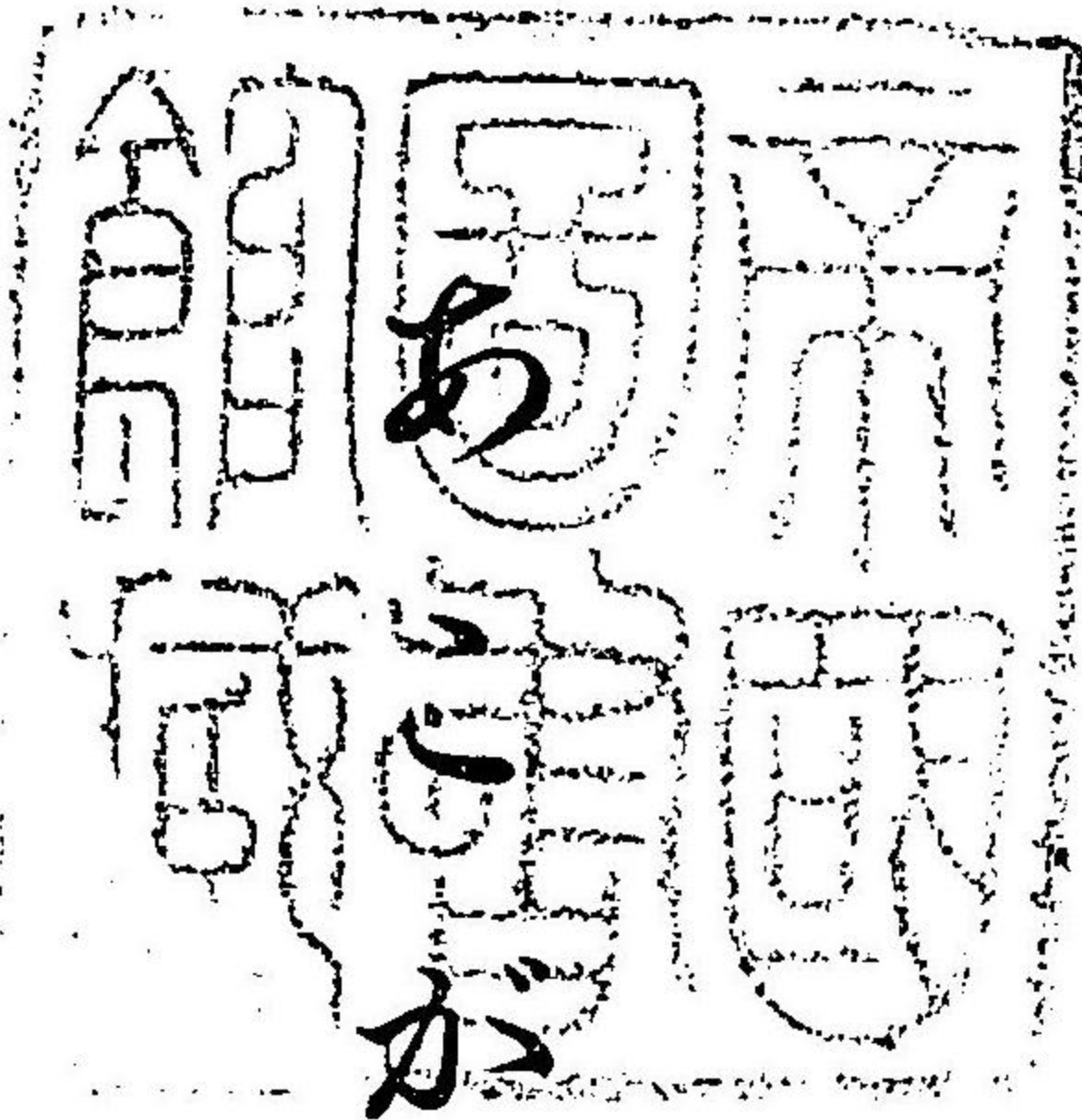


2R-19

特67
807



れ

石川啄木著



此書を
尾崎行雄氏
に献じ併て遙に
故郷の山河
に捧ぐ

啄木

婆羅門の作れる小田を食む鴉からす

なく音の耳に慣れたるか
おほをそ鳥の名にし負ふ

いつはり聲のだみ聲を

又なき歌とほめそやす

木兎梟や、椋鳥の

ともばやしこそ笑止なれ。

上田敏

聞かすや、春の山行に
林の奥ゆ、伐木の
丁々として、山更に
なほも幽なる山彦を。
こはそも仙家の斧の音か、
よし足引の山姥が
めぐりめぐれる山めぐり、
輪廻の業の音づれか、
いなとよ、ただの鳥なれど、

赤染いろのはねばりし、
黒斑、白斑のあや模様、
紅梅、朽葉の色許りて、
なに思ふらむ、きつつきの
つくづくわたる歌の枝。

げに虚なる朽木の
幹にひそめるけら虫は
風雅の森のそこなひぞ、
鉤けて食ひねてらつつき。

また人の世の道なかば
 闇路の林ゆきまよふ
 誠の人を導きて
 歡樂山にしるべせよ。
 噫、あこがれの其歌よ、
 そぞろぎわたり、胸に泌み、
 さもこそ似たれ、陸奥の
 卒都の濱邊の呼子どり
 なくなる聲は、善知鳥、安瀉。

目次

沈める鐘(序詩)	一頁
杜に立ちて	七
白羽の鶴船	八
啄木鳥	一〇
隠沼	一一
人に捧ぐ	一三
樂聲	一四
海の怒り	一六
荒磯	一七
夕の海	一九
森の追懐	二一
おもひ出	二四

いのちの舟	二九
孤境	三一
錦木塚	
にしき木の巻	三五
のろひ矢の巻	三九
桜の音の巻	四四
鶴飼橋に立ちて	五二
落瓦の賦	五六
山彦	六五
曉鐘	六七
暮鐘	六八
夜の鐘	七〇
塔影	七一
黄金幻境	七三
夢の花	七四

しらべの海	八二
五月姫	八三
ひとりゆかむ	八九
花守の歌	九二
月と鐘	九九
偶感二首	
我なりき	一〇〇
閑古鳥	一〇三
ほととぎす	一〇七
マカロフ提督追悼の詩	一〇八
金甌の歌	一一九
アカシヤの蔭	一二六
ひとつ家	一三二
壁なる影	一三四
鷗	一三六

光の門	一四〇
寂寥	一四五
秋風高歌	
黄金向日葵	一五七
我が世界	一五九
黄の小花	一六〇
君が花	一六二
波は消えつつ	一六四
柳	一六五
愛の路	一六六
落ちし木の實	一六六
秘密	一七二
あゆみ	一七四
江上の曲	一七五
枯林	一九一

天火蓋	一九九
壁畫	二〇〇
炎の宮	二〇二
のぞみ	二〇四
眠れる都	二〇九
二つの影	二一四
夢の宴	二一七
うばらの冠	二三〇
心の聲	
電光	二三二
祭の夜	二三五
曉霧	二三八
落葉の煙	二四〇
古瓶子	二四四
救済の網	二四七

あさがほ	二四八
白鶴	二四九
傘のぬし	一五〇
落楡	二五三
泉	二五七
青鷺	二六一
小田屋守	一六四
凌霄花	二六八
草莓	二七四
めしひの少女	二七八

《畢》

あこがれ

石川啄木著

沈める鐘(序詩)

一

渾沌霧なす夢より、暗を地に、
 光を天にも割ちしその曙、
 五天の大御座高うもかへらすとて、
 七寶花咲く紫雲の『時』の磬、
 瓔珞さゆらぐ軒より、生と法の

進みを宣りたる無間の巨鐘をぞ、
永遠なる生命の證と、海に投げて、
蒼穹はるかに大神知ろし立ちぬ。
時世は流れて、八百千の春はめぐり、
榮光いく度さかえつ、また滅びつ、
さて猶老なく、理想の極まりなき
日と夜の大地に不斷の聲をあげて、
(何等の靈異ぞ)劫初の海底より
『秘密』の響きを沈める鐘を告ぐる。

二

朝に、夕には、た夜の深き息に、
白晝の嵐に、擣く手もなきに鳴りて、
絶えざる巨鐘、——自然の胸の聲か、
永遠なる『眠』か、無窮の生の『覺醒』か、——
幽かに、朗らかに、或は雲にどよむ
高潮みなぎり、悲戀の咽び誘ひ、
小貝の色にも、枯葉のさゝやきにも
ゆたかにこもれる無聲の愛の響。

悵める心に、渴ける靈の唇に、
滴り玉なす光の清水めぐみ、
香りの雲吹く聖土の青き花を

あこがれ戀ふ子に天なる樂を傳ふ
救濟の主よ、沈める鐘の聲よ。
ああ汝、尊とよ『秘密』の旨と鳴るか。

三

ひとたび汝が聲心の絃に添ふや、
地の人百たり人爲の埒を超えて、
天馬のたかぶり、血を吐く愛の叫び、
自由の精氣を、耀く靈の影を
あつめし瞳に涯なき涯を望み、
黄金の光を歴史に染めて行ける。
彫る名はさびたれ、かしこに、ここの丘に、

4

墓碣、——をしへのかたみを我は仰ぐ。

5

暗這ふ大野に裂けたる裙を曳きて、
ああ今聞くかな、天與の命を告ぐる
劫初の深淵ゆたゞよふ光の聲。——
光に溢れて我はた神に似るか。
大空地と斷て、さらずば天よ降りて
この世に蓮充つ詩人の王座作れ。

(甲辰三月十九日)

杜に立ちて

秋去り、秋來る時劫の刻みうけて
五百秋朽ちたる老杉、その眞洞に
黄金の鼓のたばしる音傳へて、
今日また木の間を過ぐるか、こがらし姫。
運命せまくも惱みの黒霧落ち
陰靈いのちの痛みに唸く如く、
梢を揺りては遠のき、また寄せくる
無間の潮に漂ふ落葉の聲。

ああ今來りて抱けよ、戀知る人。

流轉の大浪すぎ行く虚の路、
そよげる木の葉ぞ幽かに落ちてむせぶ。
驕樂かくこそ沈まめ。——見よ、緑の
薫風いづこへ吹きしか。胸燃えたる
束の間、げにこれたふとき愛の榮光。

(癸卯十一月上旬)

白羽の鵝船

かの空みなぎる光の淵を、魂の
白羽の鵝船しづかに、その青渦
夢なる楫にて深うも漕ぎ入らばや。——
と見れば、どよもす高潮音匂ひて、

8

樂聲さまよふうてな、霞の帕を
透きてぞ浮きくる面影、(百合姫なれ)
天華の生鬢瑣々あけぼの染、
常樂ここにと和らぐ愛の睡。

9

運命や、寂寥兒遣れる、されど夜々の
ゆめ路のくしびに、今知る、哀愁世の
終焉は靈光無限の生の門出。
瑠璃水たたえよ、不滅の信の小壺。
さばこの地に照る日光は氷るとても
高歡久遠の座にこそ導かるれ。

(癸卯十一月上旬)

啄木鳥

いにしへ聖者が雅典の森に撞きし、
光ぞ絶えせぬ天生「愛」の火もて
鑄にたる巨鐘、無窮のその聲をぞ
染めなす「緑」よ、げにこそ靈の住家。
聞け、今、巷に喘げる塵の疾風
よせ来て、若やぐ生命の森の精の
聖きを攻むやと、終日、啄木鳥、
巡りて警告夏樹の髓にさざむ。

往きしは三千年、永劫猶すすみて

つきざる「時」の箭、無象の白羽の跡
追ひ行く不滅の教よ。——プラト、汝が
淨さを高きを天路の榮と云ひし
靈をぞ守りて、この森不斷の糧、
奇かるつとめを小さき鳥のすなる。

(癸卯十一月上旬)

隠沼

夕影しづかに番の白鷺下り、
槇の葉枯れたる樹下の隠沼にて、
あこがれ歌ふよ。——その昔、よるこび、そは
朝明、光の搖籃に星と眠り、

悲しみ、汝こそとこしへ此處に朽ちて、
我が喰み啣める泥土と融け沈みぬ。――
愛の羽寄り添ひ、青腫うるむ見れば、
築地の草床、涙を我も垂れつ。

仰げば、夕空さびしき星めざめて、
憫ひの光の、彩なき夢の如く、
ほそ糸ほのかに水底に鎖ひける。
哀歎かたみの輪廻は猶も堪えぬ、
泥土に似る身ぞ。ああさは我が隠沼、
かなしみ喰み去る鳥さへえこそ來めや。

(癸卯十一月上旬)

入に捧ぐ

君が瞳ひとたび胸なる秘鏡の
ねむれる曇りを射しより、醒め出でたる、
瑠璃羽や、我が魂、日を夜を羽搏ちやまで、
雲渦ながるる天路の光をこそ
導きたる幻眩き愛の宮居。
あこがれ淨さを花露匂ふと見て、
二人し抱けば、地の事破壊のあとも
追ひ來し理想の影ぞとほゝゑまるる。

こし方、運命の氷雨を凌ぎかねて、

詩歌の小笠に紅の緒むすびあへず、
愁ひの谷をしたどりて足惱みつれ、
峻しき生命の坂路も、君が愛の
炬火心にたよれば、黯き空に
雲間も星行く如くぞ安らかなる。

(癸卯十一月十八日)

樂 戯

日暮れて、樂堂萎れし瓶の花の
香りに酔ひては集へる人の前に、
こは何波渦沈める蒼き海の
遠音と浮き來て音色ぞ流れわたる。――

14

靈の羽ゆたかに白鳩舞ひくだると
仰げば、一絃忽ちふかき淵の
底なる嘆きをかすかに誘ひ出で、
虚空を遙かに哀調あこがれ行く。

15

光と暗とを黄金の鎖にして、
いためる心を捲きては、遠くく
見しらぬ他界の夢幻に繋ぎよする
力よ自由なる樂聲、あゝ汝こそ
天なる快樂の名残を地につたへ、
魂をしきよめて、世に充つ痛恨訴ふ。

(癸卯十一月卅日)

海の怒り

一日のつかれを眠りに葬らむとて、
日の神天より降り立つ海中の玉座、
照り映ふ黄金の早くも沈み行けば、
さてこそ落ち來し黑影、海を山を
領ずる沈黙に、こはまた、恐怖吹きて、
眞暗にさめたる海神いかる如く、
巖鳴り碎けて、地を噛む叫號の聲、
矢潮をかまけて、狂瀾陸を呪ふ。

寄するは夜の胞盾どる秘密の敵。

墮落てはこの世に、暗なき遠き昔の
信のおとづれ呼やく波もあらで、
ああ人、眠れる汝等の額に、罪の
記徴を刻むと、かくこそ潮狂ふに、
月なき荒磯邊、身ひとり怖れ惑ふ。

(癸卯十二月一日)

荒磯

行きかへり砂這ふ波の
ほの白さけはひ追ひつゝ、
日は落ちて、暗湧き寄する
あら磯の枯藻を踏めば、

(あめつちの愁ひか、あらぬ、)

雲の裾ながうなびきて、
老松の古葉音もなく、
仰ぎ見る幹からびたり。
海原を鶺鴒かすめて
その羽音波に碎けぬ。
うちまろび、大地に呼べば、
小石なし、涙は、凝りぬ。
大水に足を浸して、
蹴ずめる空を望みて、
ささがにの小さき腫と
魂更に胸にすくむよ。

秋路行く雲の疾影の
日を掩ひて地を射る如く、
ああ運命、下りて鋭斧と
胸の門割りし身なれば、
月負ふに癩せたるむくろ、
姿こそ濱芦に似て、
うちそよぐ愁ひを砂の
冷たさに印し行くかな。

(癸卯十二月三日夜)

海の海

汝が胸ふかくもこもれる秘密ありて、

常劫夜をなす底なる泥岩影、
黒蛇ねむれる鱗の薄青透き、
無限の寂寞墓原領すと云ふ。
さはこの夕和、何の意、ああ海原。
遠波ましら帆入日の光うけて
華やかにもまたしづまる平和げに
百合花添へ眠る少女の夢に似るよ。

白塗かざれる墓には汚穢充つと
神の子叫びし。外装どはかないかな。
花夢さえては女の胸罪の宿り、
夕和落ちては、見よ、海黒波わく。

酔はむや、再び。平和——妖の酒に
咲き浮く泡なる。沈黙の白墓なる。

森の追懐

落ち行く夏の日緑の葉かけ洩れて
森路に布きたる村濃の染分衣、
涼風わたれば夢ともゆらぐ波を
胸這ふおもひの影かと眺め入りて、
静夜光明を戀ふ子が清歡をぞ、
身は今、木下の百合花あまき息に
酔いつつ、古事繪巻に慰みたる

(癸卯十二月五日夜)

一日のやはらぎ深きに思ひ知るよ。

遠音の柴笛ひびきは低かるとも

鋤負ふまめ人又なき快樂と云ふ。

似たりな追懐小なき姿ながら、

沈める心に白羽の光うかべ、

葉隠れひそみてささなく杜鵑の

春花羅綾褪せたる袖を巻ける

胸毛のぬくみをあこがれ歌ふ如く、

よろこび幽かに無間の調べ誘ふ。

野梅の葩溶きたる清き彩の

罪なき望みに雀躍り、木の間縫ひて

摘む花多きを各自に誇りあひし

昔を思へば、十年の今新たに

失敗の跡なく、痛恨の深創なく、

黒金諸輪の運命路遠くはなれ、

乳よりも甘かる幻透き浮き来て、

この森緑の搖籃に甦へりぬ。

胸なる小甕は『いのち』を盛るにたえて、

つめたき悲哀の塚邊に缺くるとても、

底なる滴に尊とき香り残す

不滅の追懐まばゆく輝やきなば、

何の日靈魂終焉の朽あらむや。
啼け杜鵑よ、この世に春と靈の
さえざる心を君我れ歌ひ行かば、
歎きにかへりて人をぞ浄めうべし。

（癸卯十二月十四日稿。森は郷校のうしろ。この年の春まだ淺き頃、漂流の子病を亘ふて故山にかへり、藥餌漸く忘たれる夏の日、ひとり幾度か杖を曳きてその森にさまよひ、往時の追憶に寂寥の胸を慰めけむ。極月炬燵の樂寢、思ひ起しては惆悵に堪へず、乃ちこの歌あり。）

おもひ出

翠酔色水面に褪する
夕雲と沈みもはてし

よろこびぞ、春の青海、
眞白帆に大日射す如、
あざやかに、つばらくに、
涙なすおもひにつれて
うかびくる胸のぞめきや。

ひとたびは、夏の林に
吹鳴らす小角の響きの
うすどよむけはひ装ひて、
みかりくら狩服人の
駒並めて襲ひくる如、
戀鳥の鳥笛たのしく、

よるこびぞ胸にもえにし。

燃えにしをいのちの野火と

おのづから煙に酔ひて、

花雲の天領がくり

あこがるる魂をはなてば、

小さき胸ちいさき乍ら

照りわたる玉の常宮、

瑯環の宮柱立て、

瓔珞の透簾かけて、

ゆゆしともかしくく守る

夢の門。——門や朽ちけむ、

いつしかに碎けあれたる

宮の跡、霜のすさみや、

礎のたゞに冷たく。——

息吹けば君を包みし

紫の靄もほろびぬ。

ふたりしてほほゑみくみし

井をめぐる朝顔垣の

縄さへも、秋の小霧の

はれやらぬ深き濕りに

我に似て早や朽ちはてぬ。

ああされど、サイケが燭、

かけ揺れて、戀の小胸に
蠟涙のこぼれて焼ける
いにしへの痛みは云はじ。
とことはに心きさめる
新創を、空想の羽の
彩羽もてつくるひかさり、
白絹のひひなの君に
少女子のぬかづく如く、
うち秘めて齋き行かなむ
もえし血の名残の胸に。

(癸卯十二月末)

いのちの舟

大海中の詩の真珠
浮藻の底にさぐらむと、
風信草の花かほる
吾家の岸をとめて漕ぐ
海幸舟の真帆の如、
いのちの小舟かるやかに、
愛の帆章額に彫り、
鳴る青潮に乗り出てぬ。
遠海面に陽炎の

夕彩はゆる夢の宮、
夏花雲と立つを見て、
そこに秘めたる天の路
ひらきもやする門あると、
貢する珠、歌の珠、
のせつつ行けば、波の穂と
よるこび深く胸を撼る。

悲哀の世の黒潮に
はてなく浮ぶ椰子の實の
むなしき殻と人云へど、
岸こそ知らね、死の疾風

い捲き起らぬうたの海、
光の窓に凭る神の
瑪瑙の蓋の覆らざる
うまし小舟を我は漕ぐかな。

(甲辰一月十二日夜)

孤境

老櫓の枯樹によりて
墓碣の丘邊に立てば、
人の聲遠くはなれて、
夕暗に我が世は浮ぶ。

想ひの羽いとすこやかに
おほ天の光を追へば、
新たなる生花被衣
おのづから胸をつつみぬ。

昔の下やすけくねむる
故人のやはらぎの如、
わが世こそ靈の聖なる
白露の花のあけぼの。

いたみなき香りを吸へば、
つぶら胸光と透きぬ。

花びらに袖のふるれば、
愛の歌かすかに鳴りぬ。

ああ地に夜の荒みて
黒霧の世を這ふ時し、
わが息は天に通ひて、
幻の影に酔ふかな。

(甲辰一月十二日夜)

錦木塚

(昔みちのくの鹿角の郡に女ありけり。よしある家の流れ
なればか、かかる邊つ國はもとより、都にもあるまじき程の
優れたる姿なりけり。！日毎に細布織る校の音にもまさり

て、政子となむ云ふなる其名のをちこちに高かりけり。隣
の村長が子いつしかみそめていたう戀しにけるが、女
はた心なかりしにあらねど、よしある家なれば父なる人の
いましめ堅うて、心ぐるしうのみ過してけり。長の子とこ
ろの習はしのままに、女の門に錦木を立つる事千束に及び
ぬ。ひと夜一本の思ひのしるし木、千夜を重ねては、いな
る女もさからひえずとなり。やがて千束に及びぬれど政
子いつかなうべなふ様も見えず。男遂に物ぐるほしうな
りて涙川と云ふに身をなくしてけり。政子も今は思ひえ
たえずやなりけむ、心の玉は何物にも代へじと同じとこ
より水に沈みにけり。村人共二人のむくるを引き上げて、
つま戀ふ鹿をしぬび射にするやつばら乍らしかすがにこ
のことにみにはむくつけき手にあまる涙もありけむ、ひと
つ塚に葬りて、にしき木塚となむ呼び傳へける。花輪の里
より毛馬内への路すがら、今も旅するひとは、涙川の橋を渡
りて程もなく、草原つづきの丘の上に、大きな石三つ計り

重ねて木の柵など結ひたるを見るべし。かなしとも悲し
き物語のあとかた、草かる人にいづこと問へばげにそれな
りけり。傳へいふ、昔年々に都へたてまつれる陸奥の細布
と云ふもの、政子が織り出しけるを初めなりとかや。

にしき木の巻

横原に夕草床布きまろびて
淡日影旅の額にさしくる丘、
千秋古る吐息なしてい湧く風に
ましら雲遠つ昔の夢とうかひ、
彩もなき細布ひく天の極み、
ああ今か、浩蕩なる蒼扉つぶれ
愁知る神立たすや、日もかくるひ、

その命令の音なき聲ひびきわたる、
枯枝のむせび深く胸をゆれば
窈冥霧わがひとみをうち塞ぎて、
身をめぐる幻——それは百代遠き
邊つ國の古事なれ。ここ錦木塚。

立ちかこみ、秋にさぶる青垣山、
生くる世は朽葉なして沈みぬらし、
吹鳴せる小角の音も今流れつ、
狩馬の蹄も、はた弓弦さわぐ
をたけびもいと新たに丘をすぎぬ。
天さかる鹿角の國、遠いにしへ、

茅葺の軒並めけむ深草路を、
ああその日麻絹織るうまし姫の
柴の門行きはばかる長の若子、
とぢし目は胸戸ふかき夢にか凝る、
うなたれて、千里走る勇みも消え、
影の如たどる歩みうき近づき來る

和胸も愛の細緒繰りつむぐか、
はた秋の小車行く地のひびきか。
梭の音せせらぎなす葎の中
愁ひ曳く歌しづかに漂ひくれ。
え堪へてや、小笛とりて戸の外より

たどく／＼に節あはせば、歌はやみぬ。
くろがねの柱ぬかむ力あるに
何しかもこの袖垣くぢきえざる。
戀ひつつも忍ぶ胸のしるしにとて
今日もまた錦木立て、夕暗路を、
花草にうかがひよる霜の如く、
いと重き歩みなして今かへり去るよ。

八千束のにしき木をばただ一夜に
神しろす愛の門に立て果つとも、
束縛の荒縄もて千捲まける
女の胸は珠かくせる磐垣淵、

永き世を沈み果てて、浮き來ぬらし。
眞黒木に小垣結へる哭澤邊の
神社にして、三輪据え、祈る奈良の子らが
なげきにも似つらむ我がいたみはもと、
長の子のうちかなしむ歌知らでか、
梭の音胸刻みて猶流るる。
男のなげく怨みさはに目にうつれば、
涙なす夕草露身もはらひかねつ。

のろひ夫の巻

(長の子の歌)

わが戀は、波路遠く丹曾保船の
みやこ路にかへり行くを送る旅人が

袖かみて荒磯浦に泣きまろふ
夕ざれの深息にしたぐへむかも。
夢の如影消えては胸しなえて、
あこがるゝ力の、はた泡と失せぬ。

遠々き春の野邊を、奇琴なる
やは風にさまされては、猶夢路と
玉蜻と白う揺るゝおもかげをば
追ふなべに、いづくよりか狭霧落ちて、
砂漠のみちことく、閉ぢし如く、
小石なす涙そでに包み難し。

しるしの木妹が門に立てなむとて
千夜あまり聞きなれたる梭の音の
ああそれよ、生命刻む鋭き氷斧か。
はなたれて行方知らぬ獵矢のごと、
前後暗こめたる夜の虚に
あてもなく滅び去なん我にかある。

新衣映く被さ花束ふる
をとめらに立ちまじりて歌はむ身も、
かたくなと知らず、君が玉の腕
この胸にまかせむとて、心たぎり、
いく百夜ひとり來ぬる長き路の

さてはただ終焉に導く綱なりしか。

呪ひ矢を暗の鳥の黒羽に矧ぎ、
手にとれど、瑠璃のひとみ我を射れば、
腕枯れて、強弓弦をひく手はなし。
三年凝るうらみの毒、羽にぬれるも
かひなしや、己が魂に泌みわたりて
時じくに髓の水の涸れうつろふ。

愛ならで、罪うかがふ女の心を
きよむべき玉清水の世にはなきを、
なにしかも、曉の庭面水錆ふかさ

古真井に身を淨めて布を織るか。
梭の手をしはし代へて、その白苧に
丹雲なしもゆる胸の絲添へずや。

ああ願ひ、あだなりしか、錦木をば
早や千束立てつくしぬ。あだなりしか。
朝霜の蓬が葉に消え行く如、
野の水の茨が根にかくるゝ如、
色あせし我が幻、いつの日まで
沈淪わく胸に住むにたへうべきぞ。

わが息は早や迫りぬ。黒波もて

魂誘ふ大淵こそ、靈の海に
みち通ふ常世の死の平和なれ。
うらみなく、わづらひなく、今心は
さながらに大天なる光と透く。
さらば姫、君を待たむ天の花路。

桜の音の巻 (政子の歌)

さにずらひ機ながせる雲の影も
夕暗にかくれ行きぬ。わがのぞみも
深黒み波しづまる淵の底に
泥の如また浮きこずほろび行きぬ。

涙川つきざる水澄みわしれど、
往きにしは世のとしへ手にかへらず。
人は云ふ、女のうらみを重き石と
胸にして水底踏める男の子ありと。

枯蘆のそよぐ歌に、葉のことく、
我をうらみ、たえく、なす聲ぞこもれ。
見をろせば、暗這ふ波ほのに透きて
我をさそふ不知界のさまも見ゆる。

真袖たち、身を淨めて長年月、
祈りぬる我が涙の猶足らでか、

狂ほしや、好きに導けと頼みかけし
一條の運命の糸、いま断たれつ。

來ずあれと待ちつる日ぞ早や來りぬ。

かねてより捧げし身、天のみちに

美靈のあと追はむはやすかれども、

いと痛き世のちもひ出また泣かるる。

石戸なす絆累かたき牢舎にして

とらはれの女のいのち、そよ、古井に

あたたかき光知らず沈む黄金、

かがやきも榮えも、とく鏽の喰みき。

鹿聞くと人に供せし湯の澤路

秋摺りの錦もゆるひと枝をば

うち手折り我がかざしにさし添へつつ、

笑ませしも昨日ならず、ああ古事。

半蔀の明りひける狹庭の窓、

糸の目を行き交ひする梭の音にも、

いひ知らず、幻湧き、胸せまりて、

うとさ手は愁ひの影添ふに瘦せぬ。

ほだし、(ああ魔が業なれ。)眼を鋭く

みはり居て、我が小胸は萎え果てき。
その響き、心を裂く梭をとりて
あてもなく泣き祈れる我は愚かや

心の目内面にのみひらける身は、
靈鳥の隠れ家なる夢の國に
安き夜を眠りもせず、醒めつづけて、
氣の沮む重羽搏に血は氷りぬ。

錦木を戸にたたすと千夜運びし
我が君の歩ます音夜々にききつ。
その日數かさみ行くを此いのちの

極み知る曆どとは知らざりけれ。

戀ひつつも人のうらみ生矢なして
雨とふる運命の路など噂しき。
なげかじとすれど、あはれ宿世せまく
み年をか辿り來しに早や涯なる。

瑞風の香り吹ける木蔭の夢、
黒霧の夢と變り、そも滅びぬ。
絶えせざる思出にぞ解き知るなる
終の世の光、今か我がいのちよ。

玉鬘かざりもせし緑の髪
切りほどき、祈り、淵に投げ入るれば、
ひろごりて、黒綾なす波のおもて、
聲もなく、夜の犬空風もきえぬ。

枯藻なす我が髪いま沈み入りぬ。――
さては女のうらみ生きて、とはの床に
夫が胸をい捲かむとや、罪深くも。――
青火する死の吐息ぞここに通ふ。

ひとつ星目もうるみて淡く照るは、
我を待つと浩蕩の旅さぶしむ夫か。

愛の宮天の花の香りたえぬ
苑ならで奇縁を祝ぐ世はなし。

いざ行かむ、(君しなくば、何のいのち。)
恨み充つ世の殻をば高く脱けて、
安息に、天臺に、さらばさらば、
我が夫在す花の床にしたひ行かむ。

(甲辰の年一月十六、十七、十八日稿。この詩もと前後六章、二人の死後政子の父の述懐と、葬りの日の歌と、天上のめぐり合ひの歌とを添ふべかりしが、筆を措きしよりこゝ一歳、與會再び捉へ難きがまゝに、乍遺憾前記三章のみをこの集に輯む。)

鶴飼橋に立ちて

(橋はわがふる里、濫民の村、北上の流に架したる吊橋なり。岩手山の眺望を以て郷人賞し措かず。春曉夏暮いつをいつとも別ち難き趣あれど、我は殊更に月ある夜を好み、友を訪ふてのかへるさなど、幾度かこゝに低回、微吟の興を擅にしけむ。)

比丘尼の黒裳に髪そよく
薫ずる煙の絡む如く、
川瀬をながるる暗の色に
淡夢必の面帕して、
しづかに射しくる月の影の

愁ひにさゆらぐ夜の調、
息なし深くも胸に吸へば、
古代の奇琴音をそへて
蜻火湧く如、瑠璃の霽の
遠宮まぼろし鮮に透くよ。

八千歳天裂く高山をも、
夜の帳とちたる地に眠る
わが兒のひとりと瞰下しつゝ、
大鳳生羽の翼あげて
はてなき想像の空を行くや、
流れてつぎさる『時』の川に

相噛みせめぎてわしる水の
大波浸さず、怨嗟さかず、
光と暗とを作る宮に
詩人ぞ聖なる靈の主

見よ、かの路なき天の路を
雲車のまろがりいと静かに
(使命や何なる)曙の神の
跡追ひ驅けらし、白葩
桂の香降らす月の少女、
(わが詩の驕りのまのあたりに
象徴り成りぬる榮のさまか。)

さよまり凝りては瞳の底
生火の胸なし、愛の苑に
石神立つごと、光添ひつ。

尊ときやはらぎ破らじとか
夜の水遠くも音沈みぬ。
そよぐは無限の生の吐息、
心臓のひびきを欄につたへ、
月とし語れば、ここよ永久の
詩の頌朽ちざる鶴飼橋。
よし身は下ゆく波の泡と
かへらぬ暗黒の淵に入るも

わが魂封じて詩の門守る
いのちは月なる花に咲かむ。

(甲辰一月二十七日)

落瓦の賦

(幾年の前なりけむ、猶杜陵の學舎にありし頃、秋のひと日友と城外北邱のほとりに名たゝる古刹を訪ひて、菩提老樹の風に嘯ぶく所、琴者胡弓を按じて沈思頗る興に入れるを見たる事あり。年進み時流れて、今寒寺寂心の身、一夕銅鉦の搖曳に心動き、追憶の情禁じ難く、乃ち筆を取りてこの一篇を草しぬ。)

時の進みの起伏に

56

(かの音沈む響に似て、)
反れて千年をかへらざる
法の響を、又更に、
灰冷えわたる香盤の
前に珠數繰る比丘尼らが
細き頌歌に呼ぶ如く、
今、草深き秋の庭、
夕べの鐘のただよひの
幽かなる音をとまひて、
古りし信者の名を彫れる
苔も彩なき朽瓦、
遠き昔の夢の跡

57

語る姿の悵ましう
落ちて脆くも碎けたり。

立つは伽藍の壁の下、
兩に嵐にうたかたの
罪の瞳を打とぢて
胸の鏡に宿りたる
三世の則の奇しき火を
怖れ尊とみ手を合はせ
うたふて過ぎし天の子の
袖に摺れたる壁の下。――
ゆるべ色なく光なく

白く濁れる戸に凭りて、
落ちし瓦の破片の上
旅の愁の影淡う
長き袂を曳きつつも、
轉手やはらに古琴の
古調一彈いにしへを
しのぶる歌を奏でては、
この世も魂ももろともに
沈むべらなる音の名残
わづかに動く菩提樹の
千古の老のうらぶれに
咽ぶ百葉を見あぐれば、

古世の荒廢いと重く
新たに胸の痛むかな。

あはれ、白蘭谷ふかく
馨るに似たる香焚いて、
紫雲の法衣揺れぬれば、
起る鉦鼓の莊嚴に
寂びあるひびき胸に泌み、
すがた整ふ金龍の
燭火の影に打ゆらぐ
寶樹の柱、さては又
ゆふべくを白檀の

薫りに燻り、虹を吐く
螺鈿の壁の堂の中、
無塵の衣帶緩う
慈眼涙にうるほへる
長老の呪にみちびかれ、
裳裾静かにつらなりて、
老若の巡禮群あまた、
香華ささぐる子も交り、
禮讚歌ふ夕の座の
百千の聲のどよみては、
法の榮光の花降らし、
春の常影の瑞の雲

鍵くとばかり、人心
融けて、浄土の寂光を
さながら地に現じけむ
騎盛の跡はここ乍ら、
（信よ、荒磯の砂の如、
もとの深淵にかくれしか、
果たや、流轉の『時』の波
法の山をも越えけむか。）
残んの壁のたゞ寒く、
老樹むなしく黙しては、
人香絶えたる靈跡に
再び磬の音もさかず、

落つる瓦のたゞ長さ
破壊の歴史に碎けたり

似たる運命よ、落瓦。
（めぐるに速き春の輪の
いつしか霜にとけ行くを、
ああ、ああ我も琴の如、
暗と惑ひのほころびに
ただ一條のあこがれの
いのちを繋ぐ光なる、
その絃もろく断へむ日は、
弓弦はなれて鶴も射ず、

ほそき唸りをひびかせて
深野に朽つる矢の如く、
はてなむ里よ、そも何處。

琴を抱いて、目をあげて、
無垢の白蓮、曼陀羅華、
露と香を吹き、靈の座を
めぐると聞ける西の方、
涙のごひて眺むれば、
澄みたる空に秋の雲
今か黄金の色流し、
空廊百代の夢深き

伽藍一夕風もなく
俄かに壊れほろぶ如、
或は天授の爪ぶりに
一生の望み奏て了へし
巨人終焉に入る如く、
暗の戦呼をあとに見て、
光の幕を引き納め、
暮暉天路に沈みたり。

(甲辰二月十六日夜)

山 彦

花草
脚みて五月の杜の木蔭

囀さえずずる小鳥に和なせて歌うたひ居ゐれば、
伴とも奏ま仄はかに、夕野ゆふのの陽炎かげろうなし、

『夢ゆめなる谷や』より山彦やまひこただよひ來きる。――

春日はるひの小車こぐるま沈しづめる轍わだちの音ねか、

はた彼かの幼時ちぢの追憶おもひ聲こゑと添そふか。――

緑きよの柔息なごみ深くも胸むねに吸すひて、

黙もくせば、猶なほ且かつつ無聲むせうにひびき渡る。

ああ汝なつ、天部てんぶにどよみて、再またた落ち來こし

愛歌あいかの遺韻いんよ。さらずば地つちの心こゝろの

瑯玕ろうかん無垢むくなる虚洞うつらのかへす聲こゑよ。

山彦やまひこ！今いま我われれ清きよらに心明こゝろあけて

ただよふ光ひかりの見えざる影かげによれば、

我が歌うた却かえりて汝なつが響ひびの名な残こ傳とふ。

(甲辰二月十七日)

曉 鐘

蓮座れんざの雲渦くも光ひかりの門かどに鑿ひくや、

萬朶ばんたの葩はな黎明れいめいの笑あはれにゆらぎ、

くれなる波なみなす櫻さくらの瑞花みづはな蔭かげ、

下枝したえの夢ゆめ吹ふく黄金おうごんの風かぜに乗りて

ひびくよ、曉鐘あけかね、――無縫むほうの天領てんりやう綸りんふり

雲輦うんねん音ねなく軌きらす曙あけぼのの神かみが

むらさき紐ひもある左手ひだりての愛あいの鈴すずの

餘韻か、——朗らかに高薫亂し走る。

見よ今、五音の整調流れく
光の白彩しづかに園に撒けば、
(淨化の使命に勇みて、春の神も
袖をや揺りけめ、綾雲融くる如く、
淡色焰と技毎かぜに燃えて、
散る花燎亂滿地に錦延べぬ。

(甲辰三月十七日)

暮 鐘

聖徒の名を彫る伽藍の壁に泌みて

「永遠なる都」の滅亡を宣りし夕、
はたかの法輪無碍の聲をあげて
夢呼ぶ寶樹の林園揺れる時よ、
何らの音をか天部の樂に添へて、
暮鐘よ、ああ汝、劫初の穹に鳴れる。
天風二萬里地を吹き絶えぬ如く、
成壞の八千年今猶ひびきやまず。

入る日を送りて、夜の息さそひ出てて、
榮光聖智を無間に葬り來て、
青史の進みと、有情の人の前に
永劫友なる「秘密」よ、ああ今はた、

詩歌の愁ひに素麁の澱と沈み
夢濃きわが魂「無生」に乗せて走れ。

(甲辰三月十七日)

夜の鐘

鐘鳴る、鐘鳴る、たとへば灘の潮の
雷音落ちては新たに高む如く、
(莊嚴なるかな、「秘密」の清き矜り、)
雲路にみなぎり、地心の暗にどよみ、
月影朧ろに、霧衣白銀なし、
大夢罩めたる世界に漂ひ來て、
晝なく、夜なく、過ぎても猶過ぎざる

70

切遠法土の暗示を宣りて渡る。

71

影なき光に無終の路をひらく
『秘密』の叫びよ、滿林夢にそよぐ
葉末の餘響よ、ああ鐘、天の聲よ。
ともしび照らさぬ空廊夜半の窓に
天意にまどひて、現世の罪を泣けば、
たふとき汝が音におのづと頭下る。

(甲辰三月十七日夜)

塔影

眠りの大戸に秋の日暫し凭りて

見かへる此方に、淋しき夕の光、
劫風千古の文をぞ草に染めて
金字の塔影丘邊に長う投げぬ。
紅爛朽ち果て、飛龍を彫れる壁の
金泥跡なき荒廢の中に立ちて、
仰げば、亂雲白蛇の怒り凄く
見入れば幽影しじまのおごそかなる。

法鐘悲音の教を八十百秋
投げ出す影にと夕毎葬り來て、
亂壞に驕れる古塔の深き胸を
照らすは銷沈臨終の『秋』の瞳。

(神秘よ躍れや、)ああ今夜は下り、
寂滅封じて、萬有影と死にぬ。

(甲辰三月十八日夜)

黄金幻境

生命の源封じて天の縁
光と燃え立つ匂ひの靈の門かも。――
靈の門、げにそよ、ああこの若晴眸、
強き火、生火に威力の倦弛織りて
八千網彩影我をば捲きしめたる。――
立てるは愛の野、二人の野にしあれば、
汝が瞳を仰ぎて、身は唯言葉もなく、

遍照光裡の焰の夢に酔ひぬ。

見よ今、世の影慈光の雲を帯びて
輾り音なく熱野の涯を走る。
わしりぬ、環りぬ、ああさて極まりなき
黄金幻境！かくこそ生の夢の
久遠の瞬き進みて、二人すてに
句ひの天にと昇華の翼振るよ。

(甲辰五月六日)

夢の花

まぼろし縫へる

74

白衣透きほのぼのと

愛にうるほふ、それや白百合、

青緑摺りたる

弱肩の羅綾は

夢の焔の水無月日射、

揺れて覺めにき和風に、

眠ま白き夏の宮。

(ああ我がいのち

夏の宮。)

75

夢は破れき。

ああされど、この姿、

この天^{あま}けはひ、現^{うつ}ながらに、
こころ深くも

夢は猶^{なほ}、玉^{たま}渦^{うず}の

光^{ひかり}匂^{にお}ひの波^{なみ}わく淵^{ふち}や。

姫^{ひめ}は思^{おも}ひぬ、極^{ごく}熱^{ねつ}の

南^{みなみ}緑^{みどり}の愛^{あい}の國^{くに}。

(ああ我がいのち

愛^{あい}の國^{くに}。)

光^{ひかり}の唇^{くちびる}に

曙^{あけぼの}ぞよみがへり、

青^{あお}風^{かぜ}小^{せう}琴^ごただよふ森^{もり}に、

逝^かきてかへらぬ

夢^{ゆめ}の夜^よの調^{てい}和^わを

あこがれうるみ露^{つゆ}吹^ふく聲^{こゑ}に

姫^{ひめ}はうたひぬ、驕^{まごう}樂^{らく}の

逝^かきてかへらぬ黄金^{こがね}の世^よ。

(ああ我がいのち

黄金^{こがね}の世^よ。)

葉^はを蒸^むす白^{しろ}晝^{ひら}、

百^{ひゃく}鳥^{とり}の生^{せい}の謠^{うた}

あふれどよめく緑^{みどり}搖^{ゆり}籃^ごの

枝^{えだ}洩^もれて地^ちに

照りかへる強き日の
夏をつかれて、かほる吐息に
姫は恨みぬ、常安の
涼影甘き詩の海。

(ああ我がいのち

詩の海。)

山波遠く
沈む日の終焉の暈、
今か沈みて、焔の白矢、
涯なき涯を
わかれ行く魂の如、

78

うすれ融け行く地の黄昏に
姫は祈りぬ、大天の
靈のいのちの夢の郷。

(ああ我がいのち

夢の郷。)

79

ひと日、日すてに
沈みゆき、乳香の
夜の律調を戀ふ百合姫が
待夜ののぞみ、
その望み先づ破れて、
暗に楯どる嵐の征矢に

姫はたをれぬ、残る香の
いと懐ましき夢の花。

(ああ我がいのち

夢の花。)

水無月ふかき

森かげの一つ百合、

見えて見えざる世にあこがれし

ああその夢の

瞿粟花のにほひ羽、

あまりに高く清らかなれば、

姫は萎れぬ、夜嵐の

妬みに折るる信の枝。

(ああ我がいのち

信の枝。)

香柏の根に

(幻やげに)あはれ

夢の名残を葬むり去りて、

去りて嵐の

血寂びたる矢叫びは

いづち行きけむ。——ただ其夜より

姫は匂ひぬ青玉の

天壇い照る藝の燭。

(ああ我がいのち

藝の燭。)

(甲辰五月十一日夜)

志らべの海

(上野女史に捧げたる)

淡紅染め卯月の日に酔ふ香樺の
律調のあけぼの漸やく春ぞ老いて、
歌聲うるむや、柔音の海に深く
古世の思をうかべぬ。——ああほのぼの、
ゆらめく藝の燭の波の中に、
花摺被衣よ、行きても猶透きつつ、

82

(心は懐みぬ、ああその痛き姿。)

五百年あらたに沈淪べる愛を呼ばふ。

83

凝りては瞳の暫しも動きがたく、
藝の燭火しづかに我を導きて、
透影羽衣光の海にわしる。
見よ今、やはら手轉ずる樂の姫が
眼光みなぎる天路の夢の匂ひ、
光の揺曳流るる律調の海。

(甲辰五月十五日)

五月姫

夢の谷、

新影あまき

五月そよ風匂ひたる

にほひ紫吹く桐の

夢の谷、

青草眠る

みどり小牀に五月姫、

白晝うるほふ愛の夢。

まぼろしの

姫がおもわは

ハイアシンスの滴露の

黄金しただりなまめける

水盤の

そしらぬ光。

夢は波なき波なれや、

香膏の戀の彩。

黒髪の

さゆらぎ似たり

むらさき房の桐の花。

花はゆらぎて、わかやげる

紅の唇

ほほゑみ添へば、

白羽夢の羽かるらかに
小蝶とまりぬ、愛の香に。

媚風の

けはひやはらに
額にたれたる小百合花。

小百合にほへば、我が姫の
むね圓き

ゆめも匂ひぬ、

谷もにほひぬ、天地の
光も夢のにほひ園。

夢の谷、

ゆめこそ深き

ここぞ匂ひの愛の宮。

宮の玉簾むらさきの

英華に

今ひるがへれ、

シャロンの野花谷百合に

ひるがへりたる愛の旗。

姫が目は

外にとぢたる、

とぢたる園の愛の門。

園をうがちて、丘こえて、
をどりつつ
生の小穉の
おとづれ來らば、姫が夢
柘榴と咲かめ、甘き夢。

まぼろしの
さめてさめざる
(げにさもあれや、)生の谷。
谷はつつみぬ、いにしへゆ
まぼろしの
さめてさめざる

光、平和、愛の夢、
眠りに生くる五月姫。

(甲辰五月十六日)

ひとりゆかむ

日はくれぬ。
(愁ひのいのち)
幻想の森に、いざや
ひとりゆかむ。
萬有音をひそめて、
(ああ我がいのち)おもひでの
妙樂の夜あまき森。

(夜のおもひ
いのちのおもひ)

戀成りぬ。

(夢見のいのち)

忘我の森に、いざや

ひとりゆかむ。

花罌粟にほひゆるみて、

(ああ我がいのち)つく息の

みどりうす霏ゆらぐ森。

(夜のにほひ

戀のにほひ)

戀破れぬ。

(なげきのいのち)

祈りの森に、いざや

ひとり行かむ。

面影、いのるまに

(ああ我がいのち)天の生

あらたに馨る愛の森。

(夜のいのり

いのちのいのり)

月照りぬ。

(あてなるいのち)

幻想の森に、いざや

ひとりゆかむ。

ほのぼの、月の光に

(ああ我がいのち故郷の

黄金花岸うかぶ森。

(夜のいのち

ああ我がいのち)

(甲辰五月十七日)

花守の歌

夜はあけぬ。

生の迎ひに

心の住家、園の

門を明けむ。

光よ、花に培かへ。

夢より夢の關据ゑて、

孤境の園に花を守る。

花咲くや、

愛の白百合、

愛はほのぼの、夢の

關に明けて、

露吹く香蓋

我にそなへぬ、我が守る
幻、光、生の園。

はなやかに
黄金よそほふ
姫の百人、唇に
ほこり見せて、
ゆたかに門をよぎりぬ。――
それには似じな、わが胸の
あてなる夢に生くる花。

日は闌けぬ、

晝の沈黙。――

かかる日なりき、我は
ひとりゆきぬ、
新たに生や香ると。
守る孤境の園を出て
黄金よそほふ市の宮。

いかめしき
門守の姫ら、
我をこばみぬ、『園の
鍵を捨てよ。』
うつろの笑や、宮居の

権力ちからうしろに、をどろきて
我はかへりき、わが園に。

つちかへば、

花はあつと

天あまにむかひぬ。これや

生の梯はしか。

ねむれば園は花樓はなごう、

靈たまの隠家かくしよ。我が守る

小こさき園生おんせいに我わがぞ王おう。

やはらぎの

愛歌あいかわたるや、

花の大波おほなみ、園に

しらべ搔かりて、

天あまなる夢ゆめの故郷ふるさと

匂におひ海原うみはらさながらに、

光ひかりと透すきぬ孤境ひとりどろ園。

日はくれぬ

夢の守りに

心の住家すま、いさや

門をささむ。

夜なく日なき園には

夢より夢の關据ゑて、
天路ひらかむ鍵秘めぬ。

夜よ降りて
ものみな包め。

わが守る園の門には
暗は許りず。

我が園、今か世界に

光をつくる源の

孤境の園に我ぞ王なれ。

(甲辰五月十九日)

月と鐘

(とある風琴の曲に合はせむとて友のために作
れる小歌)

あまぢはるかに故里の
樂の名残をつぐるとて、
さくらの苑におぼるなる
夢の色ひく月の影。

花は眠れど、人の子の
夢なりがたき ところ、
とはの眠りに入れよとて
月に泣くらむ夜半の鐘。

偶感二首

(甲辰五月二十日の曉近き頃、ふと目さめて、岩手ゆく
春の夜風にうるほふ残燈の下、廣き世の眠りに我の
みぞさめて、筆を染めける。)

我なりき

ほのかに夜半に漂ふ鐘の音の
いのちぞ深さまほろき、——『我』なりき。
『我』こそげにや觸れても觸れ難き
流るる幻。されば人よ云へ、
時より時に跡なき水漚どと。

ああそよ、水漚ひと度うかびては
時あり、始あり、また終あり。
瞬き消えぬ。——いづこに？そは知らず、
あとなき跡は流れて、人知らず。

瞬時、さなり瞬時、それ既に
永久なる鎖かがやく一閃。
無生よ、さなり無生よ、それやはた、
とはなる生の流轉の不現影。——
或ひは人よ、汝等が自らを
みづから蔑す沈淪の肉の聲。

ああ人、さらばいのちの源泉の
見えざる『我』を『彼』とぞ汝呼べよ。
無生の生に汝等が還る時、
有生の生の日光まばゆきに
『彼』とぞ我は遊ばむ、靈の國。

見えざる光、動かぬ夢の羽、
音なき音よ、久遠の瞬きよ、
まぼろし、それよ、『ま』ことの『我』なりき。
『彼』こそ靈の白瀧、——『我』なりき。——
ほのかに夜半にただよふ鐘の音の
光を纏ふまぼろし、——『我』なりき。

閑古鳥

曉迫り、行く春夜はくだち、
燭影淡くゆれたるわが窓に、
一聲、今我れききぬ、しののめの
呼笛か、夜の別れか、閑古鳥。

ひと聲聞きぬ。ああ否、我はただ、
(懐める胸の叫びか、重息の
はるかに愁ひの洞にどよみ来て
おのづとかへる響か、ああ知らず。)
ただ知る、深きおもひの淵の底、

見えざる底を破りて、何者か
わが胸つける刃ありと覺ふのみ。

をさなき時も青野にこの聲を
きさける日あり。今またここに聞く。

詩人の思ひとこしへ生くる如、
不滅のいのち持つらし、この聲も。

永遠！それよ不滅のしばたたき、

またたき！はたや、暫しのとこしなへ。

この生、この詩、(しばしのとこしなへ、)

或は消えぬ、かの聲消えし如、

消えても猶に(不滅のしばたたき)

たとへばこの世終滅のあるとても、

ああ我生きむ、かの聲生くる如。

似たりなまことこの詩とかの聲と。――

これげに彌生鶯春を讀め、

世に充つ藝の聖花の盗み人、

光明の敵、いのちの賊の子が

おもねり甘き醉歌の類ならず。

健闘、つかれ、くるしみ、自矜に

光のふる里しのお真心の

いのちの血汐もえ立つ胸の火に

染めなす驕り、不斷の靈の糧。
我ある限りわが世の光なる
みづから叫ぶ生の詩、生の聲。

さればよ、あはれ世界のとしへに
いつかは一夜、有情の（ありや、否）
勇士が胸にひびきて、寒古鳥
ひと聲我によせたるおとなひを、
思ひに沈む心に送りえば、
わが生、わが詩、不滅のしるしぞと、
静かに我は、友なる鳥の如、
無限の生の進みに歌ひつづけむ。

ほととぎす

（甲辰六月九日、夏の小雨の涼けき禪房の窓に、白蘋の花など
浮べたる水鉢を置きつつ、岩野泡鳴兄へ文を認めぬ。時に
聲あり、彷彿として愁心一味の調を傳へ來る。屋後の森に
杜鵑の啼く也。乃ち匆々として文の中に記し送りける。）

若き身ひとり静かに凭る窓の
細雨、夢の樹影の雫やも。
雫にぬれて今啼く、古への
ながさほろびの夢呼ぶほととぎす。
おお我が小鳥、ひねもす汝が歌ふ
哀歌にこもれ、いのちの高き聲。――

そよ、我がわかき嘆きと矜ぶりの
つきぬ源、勇みとたたかひの
糧にしあれば、汝が歌、我が叫び、
これよ、相似る「愁」の兄弟ぞ。
愁ひの力、(おもへば、わがいのち)
黄金の歌の鎖とたえせねば、
ほろべる夢も詩人の嘆きには
あらたに生きぬ。愁よ驕りなる。

マカロフ提督追悼の詩

(明治三十七年四月十三日、我が東郷大提督の艦隊大擧して
旅順港口に迫るや、敵將マカロフ提督之を迎撃せむとし、槍

108

鎗を下して其旗艦ペトロパフロスクを港外に進めしが、
武運や拙なかりけむ、我が沈没水雷に觸れて、巨艦一爆、提督
も亦艦と運命を共にしぬ。)

109

嵐よ黙せ、暗打つその翼、
夜の叫びも荒磯の黒潮も、
潮にみなぎる鬼哭の啾々も
暫し唸りを鎮めよ。萬軍の
敵も味方も汝が矛地に伏せて、
今、大水の響に我が呼ばふ
マカロフが名に暫しは鎮まれよ。
彼を沈めて、千古の浪狂ふ、
弦月遠きかなたの旅順口。

ものみな聲を潜めて、極冬の
落日の威に無人の大砂漠
劫風絶ゆる不動の滅の如、
鳴りをしづめて、ああ今あめつちに
こもる無言の叫びを聞けよかし。
さけよ、——敗者の怨みか、暗濤の
世をくつがへす憤怒か、ああ、あらず、——
血汐を吞みてむなしく敗艦と
共に没れし旅順の黒瀝裡、
彼が最後の瞳にかがやける
偉靈のちから鋭どき生の歌。

ああ偉いなる敗者よ、君が名は
マカロフなりき。非常の死の波に
最後のちからふるへる人の名は
マカロフなりき。胡天の孤英雄、
君を憶へば、身はこれ敵國の
東海遠き日本の一詩人、
敵乍らに、苦しき聲あげて
高く叫ぶよ、(鬼神も踴づけ、
敵も味方も汝が矛地に伏せて、
マカロフが名に暫しは鎮まれよ。)
ああ偉いなる敗將軍神の

撰びに入れる露西亞の孤英雄、
無情の風はまことに君が身に
まこと無情の翼をひろげきと。

東亞の空にはびこる暗雲の
亂れそめては、黃海波荒く、
殘艦哀れ旅順の水寒き
影もさびしき故國の運命に、
君は起ちにき、み神の名を呼びて、――
亡びの暗の叫びの見かへりや、
我と我が威に輝やく落日の
雲路しばしの勇みを負ふ如く。

壯なるかなや、故國の運命を
擔ふて勇む胡天の君が意氣。
君は立てたり、旅順の狂風に
檣頭高く日を射す提督旗。――
その旗、かなし、波間に捲きこまれ、
見るく君が故國の運命と、
世界を撫づるちからも海底に
沈むものとは、ああ神、人知らず。

四月十有三日、日は照らず、
空はくもりて、亂雲すさまじく

故天にかへる邊土の朝の海、
（海も狂へや、鬼神も泣き叫べ、
敵も味方も汝が鋒地に伏せて、
マカロフが名に暫しは踏むげ。）
萬雷波に躍りて、大軸を
砕くとひびく刹那に、名にしおふ
黄海の王者、世界の巨艦も
くづれ傾むく天地の黒淵裡、
血汐を浴びて、腕をば拱ぎて、
無限の憤怒、怒濤のちどきの
渦巻く海に瞳を凝らしつつ、
大提督は靜かに沈みけり。

ああ運命の大海、とこしへの
憤怒の頭擡ぐる死の波よ、
ひと日、旅順にすさみて、千秋の
うらみ遣せる秘密の黒潮よ、
ああ汝、かくてこの世の九億劫、
生と希望と意力を呑み去りて
幽暗不知の界に閉ぢてめて、
如何に、如何なる證を、永遠の
生の光に、理示すぞや。
汝が、迫害にもろくも沈み行く
この世この生、まことに汝が目

映るが如く値のなきものか。

ああ休んぬかな。歴史の文字は皆
すでに千古の涙にうるほひぬ。
うるほひけりな、今また、マカロフが
おほいなる名も我身の熱涙に。――
彼は沈みぬ、無間の海の底。
偉靈のちからこもれる其胸に
永劫たえぬ悲痛の傷うけて、
その重傷に世界を泣かしめて。

我はた惑ふ、地上の永滅は、

力を仰ぐ有情の涙にぞ、

仰ぐちからに不斷の永生の
流轉現する尊ときひらめきか。

ああよしさらば、我が友マカロフよ、
詩人の涙あつきに、君が名の
叫びにこもる力に、願くは
君が名、我が詩、不滅の信とも
なぐさみて、我この世にたたかはむ。

水無月くらき夜半の窓に凭り、
燭にそむきて、静かに君が名を
思へば、我や、音なき狂瀾裡、

したしく君が渦巻く死の波を
制す最後の姿を靦るが如、
頭は垂れて、熱涙せきあへず。
君はや逝きぬ。逝きても猶逝かぬ
その偉いなる心はとこしへに
偉靈を仰ぐ心に絶えざらむ。
ああ、夜の嵐、荒磯のくろ潮も、
敵も味方もその額地に伏せて
火焰の聲をあげてぞ我が呼ばふ
マカロフが名に暫しは鎮まれよ。
彼を沈めて千古の浪狂ふ
弦目遠きかなたの旅順口。

(甲辰六月十三日)

金甌の歌

あけぼの光纏へる青雲の、
ときはかきはに眠と暗となき、
幻、律べ、さまよふ聖宇の中、
新たに匂ふいのちのほのぼのと
我は生れき。大日の灼やさに
玉髓湛ふ黄金の花瓶を
青摺綾のたもとに抱きつつ。
羅かへし、しづかに白龍の

石階踏めば、星皆あつまりて、
裳裾を縫へる緑のエメラルド。
歩み動けば、小櫛の弦の月、
白銀うるむ兜の前の星。
嗽下すかなた、仄かに讃頌の
夜の聲夢の下界をどよもしぬ。

白晝の日射めぐれる苑の夏、
かほる檸檬の樹影に休らへば、
閑ぎたたかふ浮世の市超えて、
見わたすかなた、青波鳴る海の
自然の樂のひびきの起伏に

流るゝ光、それ我が金甌の
みなぎる句ひ漂ふ影なりき。

青垣遶り、天突く大山の
いただきそそる巖に佇めば、
世は夜ながら、光の隈もなく、
無韻のしらべ、朝の鐘の如、
胸に起りて千里の空を走せ、
山河、郷も、舟路もおしなべて
投げたる影にみながら包まれぬ。

野川氾濫れて岸邊の雛菊の

小花泥水になやめる姿見て、
あまりに痛み運命を我泣くや、
水にうつれる小花のおもかげに、
幻ふかく湛ふる金甌の
底にかがやく生火の文字にして、
いのちの主の涙ぞ宿れりき。

想ひの翼ひまなく、梭の如、
あこがれ、嘆き、勇みの経緯に、
見ゆる、見えざるいのちの機織れば、
天地つつみひろぐる帕の中、
わが金甌のおもてに、榮光の

七燭いてる不老の天の樂、
ほのかに浮びただよふ影を見ぬ。

海には破船、山には魔の叫び、
陸なる罪の館に災禍の
交々起る嵐の夜半の窓、
戰慄せまるまなこを閉ぢぬれば、
あてなるさまや、胸なる金甌の
おもてまろらに光の香はみちて、
たえざる天の糧をば湛えたる。

ああ人知るや、わが抱く金甌ぞ、

(そよわがいのち)尊とき神の影、
生きたる道、生きたる天の樂、
いのちの光、ひめたる『我』なりき。
涯なく限りなきこの天地の
力を力とぞする『彼』よ、げに
我が金甌の生火の髓の水。

されば我がゆく路には、ものみな
戦ひ、愁ひ、よろこび、怒り、皆
我と守れる心の閃めきに
融けて唯一の生命にかへるなる。
ああ我が世界、すなはち、人の、また

み神の愛と力の世界にて、
眠と富の入るべき國ならず。

天地知るす源、創造の
聖宇の光に生れし我なれば、
わが聲、涙、おのづと古郷の
缺くる事なきいのちと愛の音に、
見よや、天なる眞名井の水の如、
玉髓あふれつさせぬ金甌の
雫流れて凝りなす詩の珠。

アカシヤの蔭

たそがれ淡き揺曳やはらかに、
收まる光暫しの名残なる
透影投げし碧の淵の上、
我ただひとり一日を漂へる
小舟を寄せて、アカシヤ夏の香の
木蔭に櫂をとどめて休らひぬ。

流れて涯も知らざる大川の
暫しと淀む翠江夢の淵！
見えざる靈の海原花岸の

ふる郷とめて、生命の大川に
ひねもす浮びただよふ夢の我！
夢こそ暫し宿れるこの岸に
ああ夢ならぬ香りのアカシヤや。

野末に匂ふ薄月しづかなる
光を帯びて、微風吹く毎に、
英房ゆらぎ、真白の波湧けば、
みなぎる薫りあまさに蜜の蜂
群るる羽音は暮れゆく野の空に
猶去りがての眩やさ、夕の曲。

纒結とらふゆひて忘我わづかの歩みもて、
我は上のぼりぬ、アカシヤ咲く岸に。――
春の夜櫻おぼろの月の窓
少女やとめが歌にひかれて忍ぶ如。

ああ世の戀よ、まことに淀よどの上の
アカシヤ甘き匂ひに似たらずや。
いのちの川の夢なる青淵あおぞらに
夢ならぬ香かの雫しづくをそそぎつつ、
幻過ぐるいのちの舟よせて、
流るる心に光の鎖くさりなす
にほひのつきぬ思出結むすぶなる。

淀める水よ、音なき波の上に
没薬ぼつやく撒まくとしただるアカシヤの
その香かはてなく流るる汝なが旅に
消ゆる日ありと誰かは知りうるぞ。
ああ我が戀よ、心の奥ふかく、
汝なが投げたる光と香りとの
(たとへ、わが舟巖いわたに覆くわへり、
或は暗の嵐に迷ふとも、)
沈む日ありと誰かは云ひうるぞ。

はた此の岸に溢るる平和へいわの

見えざる光、不斷の風の樂、
光と樂にさまよふ幻の
それよ、我が旅はてなむ古郷の
黄金の岸のとはなる榮光と
異なるものと、誰かははかりえむ。
ああ汝水よ、われらはふるさとの
何處なりしを知らざる旅なれば、
アカシヤの香に南の國おもひ、
戀の夢にし永遠なる世を知るも、
そは罪なりと誰かはさばきえむ。
ああ今、月は靜かに萬有を

ひろごり包み、また我心をも
光に融かしつくして、我すてに
見えざる國の宮居に、アカシヤと
咲きぬるかともやはらぐ愛の岸、
無垢なる花の匂ひの幻に
神かの姿けだかき現かな。

水も淀みぬ。アカシヤ香も増しぬ。
いざ我が長きいのちの大川に
我も宿らむ、暫しの夢の岸。――
暫しの夢のまたたき、それよげに、
とはなる脈のひるまぬ進み搏つ

まことの靈の住家の證なれ。

(甲辰六月十七日)

ひとつ家

にこれる浮世の嵐に我怒りて、
孤家、荒磯のしじまにのがれ入りぬ。
捲き去り、捲きくる千古の浪は碎け、
くだけて悲しき自然の樂の海に、
身はこれ寂寥兒、心はただよひつつ、
静かに思ひぬ、——岸なき過ぎ來し方、
あてなき生命の舟路に、何處へとか
わが魂孤舟の楫をば向けて行く、と。

132

夕浪懶く、底なき胸のどよみ、
その色、音皆不朽の調和もて、
捲きては碎くる入日のこの束の間——
沈む日我をば、我また沈む日をば
凝視めて叫ぶよ、無始なる暗、さらずば
無終の光よ、渾てを葬むれとぞ。

(甲辰六月十九日)

壁なる影

夜風にうるほひ、行春淡き
有明燭の火影を揺れて、

133

ああ今、ほのかに、幻ふかく
起伏さだめぬ影こそ壁に。

詩歌の愁ひに我が身は瘦せて、
くだつ夜、低唱、無興の窓に。
こは何、落ちくる壁なる影よ、
静かに、静かに、捲きてはひらく。

たとへば、大海青波鳴りて
涯なき涯にとただよふそれか。
或は、無終の歴史の上に
湧き、また沈める流轉の跡か。

めぐれる影にと思は耽る。――

ああ今、我聞く、音なき波に
遠灘どよもす響ぞこもれ、――
思の青渦、とく、またゆるく。

とく、またゆるかに影こそ揺れば、
うかべる光に心は深ふ。――
この影、幻、ああ聞きがたき
天海『秘密』のそのおとづれか。

思は高めば、影また深く、
見えざる文こそ壁には照れる。――

幾夜の我が友、そよわがいのち、
秘密に泳げる我が影なりき。

燈火^{ともしび}うするる。薄^{うす}れよ。暗^{くら}も

心の壁なる我が影消^けさじ。

ああ我^わ汝^にに謝^{あやま}す、我が夜は明けば、
この影、まことの光に生きむ。

(甲辰六月二十日)

鷗

藻の香に染みし白^{しろ}晝^{ひら}の砂^{すな}枕^{まくら}、
ましろき鷗^{かもめ}、ゆたかに、波の穂^ほを

光の羽^{はね}にわけつつ、碎^{くだ}け去^いる
汀^{つら}の漚^{あわ}にえものをあさりては、
わが足近く翼^{つばさ}を休^{やす}らへぬ。

諸^{もろ}手^てをのべて、高^{たか}らに吟^{ぎん}ずれど、
鳥驚^{おど}かず、とび去^いらず、
ぬれたる砂にあゆみて、退^ひき、また
寄^よせくる波をむかへて、よろこびぬ。

つぶらにあきて、青海の
匂^{にお}ひかがやく小腫^{こしむ}は、
眞珠^{まゆ}の光あつめし聖^{せい}の壺^{つぼ}。

はてなき海を家とし、歌として、
おのが翼を力と遊べばか、
汝が行くところ、瞳の射る所、
狐疑、怖れ、さげしみ、あなどりの
さもしき陰影は隠れて、空蒼し。

ああ逍遙よ、をきての網の中
立ちつつまれてあたりをかへり見る
ひなしき鎖解きたる逍遙よ、
それただ我ら自然の寵兒らが
高行く天の世に似る路なれや。
來ても聞けかし、今この鳥の歌。――

さまよひなれば、自由なる戀の夢、
あけぼの開く白藻の香に宿り、
起伏つきぬ五百重の浪の音に
光と暗はい湧きて、とこしへの
勇みの歌は、ひるまぬ生の樂。

ああ我が友よ、願ふは、暫しだに、
つかるる日なき光の白羽をぞ
翼なき子の胸にもゆるさずや。
汝があるところ、平和、よるこびの
軟風かよひ、黄金の日は照れど、
人の世の國けがれの風長く、

自由の花は百年地に委して
不朽と詩との自然はほろびたり。

(甲辰八月十四日夜)

光の門

よすがら堪へぬなやみに氣は沮み、
黒蛇ねむり、八百千の梟の
暗聲あはす迷ひの森の中、
あゆみにつるる打葉の唸きをも
罪にか誘ふ陰府のあざけりと
心責めつつ、あてなくたどり來て、
何かも、どよむ響のあたらしく

140

胸にし入るに、驚き見まもれば、
今こそ立ちぬ、光の門に、我れ。

141

ああ我が長き悶の夜は退き、
香もあたらしき朝風吹きみちて、
吹き行く所、我が目に入るところ、
自由と愛にすべての暗は消え、
かなしき鳥の叫びも、森影も、
うしろに遙か谷間にかくれ去り、
立つは自然の揺床、しろがねの
砂布きのべし朝の磯の上。

不朽の勇み漲る大洋の
張りたる胸は、はてなく、紫の
光をのせて、東に、曙高き
白幟のぼる雲際どよもしぬ。
ああその光、——青渦底もなき
海底守る秘密の國よりか。
はた夜と暗と夢なき大空の
紅玉匂ふ玉階すべり來し
天華のなだれ。或は我が胸の
生火の焰もえ立つひらめきか。——
蒼空かぎり、海路と天の門の
落ち合ふ所、日輪おごそかに

あたらしき世の希望に生れ出て、
海と陸とのとこしへ抱く所、
ものみな荒む黑影夜と共に
葬り了へて、長夜の虚洞より、
わが路照らす日ぞとも、わが魂は
今こそ高き叫びに醒めにたれ。

明け立ちそめし曙光の逆もどり
東の宮にかへれる例なく、
一度醒めし心の初日影、
この世の極み、眠らむ時はなし。
ああ野も山も遠鳴る海原も

百千の鐘をあつめて、新らしき
光の門に、ひるまぬ進軍の
歡呼の調の関をば作れかし。

よろこび躍り我が踏む足音に
驚き立ちて、高きに磯雲雀
うたふや朝の迎への愛の曲。
その曲、浪に、砂に、香藻に
い渡る生の光の聲撒けば
わが魂はやく、白羽の鳥の如、
さまよふ樂の八重垣うつくしき
曙光の空に融け行き、翅をのべて、

名たたる猛者が弓弦鳴りひびき
射出す征矢もとどかぬ蒼穹ゆ、
青海、巷、高山、深森の
わかちもあらず、皆わがいとし兒の
覺めたる朝の姿と臨むかな。

(甲辰八月十五日夜)

寂 寥

片破月の淋しき黄の光
破窓洩れて、老尼の袈裟の如、
静かに細うふるひて、読みさしの
書の上、さては黙座の膝に落ちぬ。

草舎の軒をめぐるは千萬の
なげきの糸のたてぬき織り交せて
しらべぞ繁き叢間の虫の歌。
夜の鐘遠く、灯も消えがてに、

ああ美しき名よ、寂寥！

天地眠り沈みて、今こそは
汝がいと深き吐息と脈搏の、
ひとりしさめて物思ふわが胸と
すべての根ざす地心にひびく時。

壁には淡き我が影。堆たかく
亂れて膝をかこめる黄卷は

さながら遠き谷間の虚洞より
脱け出て來ぬる『秘密』の精の如。――
かかる夜幾夜、見えざる界より、

美しき名よ、寂寥！

汝この窓を音なく、月影の
鈍色被衣纏ひてすべり入り、
なつかし妻の如くも親しげに
ほほゑみ見せて側へに座りけむ。

見よ、汝が吐息静かに吹く所、
人の心の曇りは拭はれて、
あたりの『物』の動きに、動かさる

まことの『我』の姿の明らかに
宿るを眺め、汝が脈搏つ所、
すべての音は潜みて、ただ洪き
心の海に漂ふ大波の
寄せては寄する響のきこゆなる。
美しき名よ、寂寥！
ああ汝こそは、鋭き斧をもて
この人生の假面を剝ぎ去ると
命負ひ來つる有情の使者か。
汝があとづれば必ず和らかに、
またいと早く、恰も風の如。

二人のあるや、汝が眼は一すじに
貫ぬくとてか、胸にとそそぎ來て、
その微笑もまことに莊嚴に、
たとへば百の白刃の劍もて
守れる暗の沈黙の森の如、
聲なき言葉四壁にみちくして、
おのづと下る頭はまた起きず。
美しき名よ、寂寥！
かくて再び我をば去らむとき、
涙は涸れて、袂はうるほへど、
あらたに胸にもえ立つ生命の
石炭こそ汝が遺せる紀念なれ。

美しき名よ、寂寥！

嘗ては我も多くの世の人が
厭へる如く、汝をばいとへりき。
そはただ春の陽炎もゆる野に
とび行く蝶の浮きたる心には、
汝が手のあまり霜には似たればぞ。
さはあれ、汝やまことに涯もなき
大海にして、不斷の動搖に、
眞面目と、常に高きに進み行く
心の奥の鍵をぞ秘めたれば、
遂には深き崇高き生命の

勇士の胸の門をばひらくなり。

美しき名よ、寂寥！

たとへば汝は秘密の古鏡。
人若し姿投ぜば、いろくの
假装はすべて、濡れたる草の葉の
日に乾く如、忽ち消えうせて、
おもてに浮ぶまるらの影二つ、—
それ、かざりなき赤裸の『我』と、また
『我』をしめぐる自然の偉いなる
不朽の力、生火の燃ゆる門。
げに寂寥にむかひて語る時、

人皆すべて眞の『我』が言葉、
『我』が聲をもて眞を語るなる。

美しき名よ、寂寥！

汝また長き端なき鎖にて、
とこしへ我を繋ぎて奴隸とす。
家をば出でて自然に對す時、
うづ巻く潮の底より、天そそる
秀峰高き際より、さてはまた、
黄に咲く野邊の小花の葉蔭より
雀躍り出でて、胸をば十重二十重
靴と捲きつつ、尊とき天の名の

現示の前頭を下げしむる
それその力、あまた汝にあり。

美しき名よ、寂寥！

戀する者の胸より若しも汝が
おとづれ絶たば、言語も聞きえぬ
心の奥の叫びを語るべき
慰安の友の滅びて、彼遂に
たへぬ惱みに物にか狂ふべし。
またかの善と眞を慕ふ子に、
若し汝行きて、みづから自らに
教ふる時を與ふる勿りせば、

遂には彼の心も枯るるらむ。

美しき名よ、寂寥！

寂寥人を殺すと誰か云ふ。

靈なきむくろ、花なき醜草は

汝がおごそかの吐息に、げに或は

死にもやすべし。朽木に花咲かず。

ああ寂寥よ、汝が脈搏つところ、――

我と我との交はる所にて、

うちめぐらせる靈氣の八重垣に

詩歌の花の戀しきみ園あり。

そこに我が魂しづかにさまよふや、

おのづと起る唸きの聲は皆、

歴史と堂と制規を脱け出でて、

親しく人と自然を司どる

慈光の神に捧ぐる深祈禱。

あふるる涙、それまた世の常の

涙にあらず、まことの生命の

源ふかく歸依する瑞の露。

美しき名や、寂寥！

汝こそげにも心の在家にて、

見えぬ奇かる界に門ひらき、

またこの生けるままなる世の態に

却りて大^{おほ}き靈^{たま}怪^{ばい}の隠^{かく}れ花^{ばな}
かしこに、ここに、各^か自^{みづか}の胸^{むね}にさへ
咲けるを示し、無言の教垂れ、
想ひをひきて自在の路告ぐる
豊麗無垢の尊とき靈の友。
ああこの世界ひとり、『人』ありて、
若し我が如く、美し寂寥の
腕^{うで}に抱かれ、處^{ところ}と時を超え、
あこがれ泣くを樂しと知るあらば、
我この月の光に融け行きて、
彼にか問はむ、『榮華と黄金の
まばゆき土の値や幾何』と。
(甲辰八月十八日夜)

秋風高歌

《雜詩十章甲辰初秋作》

黄金向日葵

我が戀は黄金向日葵、
曙いだす鐘にさめ、
夕の風に眠るまで、
日を趁ひ光あこがれ、まろらかに
眩^{くら}ゆくめぐる豊熱の
彩^{いろ}どり饒^{にぎ}きこがねの花なれや。

これ夢ならば、とこしへの
さめたる夢よ、こがねひぐるま。

これ影ならば、あたたかき
瑞雲まよふ照日の生ける影。

圓らかなれば、天蓋の
遮りもなき光の宮の如。

まばゆければぞ、王者にすなる如、
百花、見よや芝生にぬかづくよ。

今はた、似たり、かなたの日輪も、
わが戀の日にあこがれて

ひねもすめぐるみ空の向日葵に。

(八月二十二日)

我が世界

世界の眠り、我れただひとり覺め、
立つや、草這ふ夜暗の丘の上。
息をひそめて横たふ大地は
わが命に行く車にて、
星鏤めし夜天の浩蕩は
わが被きたる笠の如。

ああこの世界、或は朝風の

光とともに、再びもとの如、
我が司配はなるる時あらむ。
されども人よ知れかし、我が胸の
思の世界、それこの世界なる
すべてを超えし不動の國なれば、
我悲しまず、また失はず、
よしこの世界、再びもとの如、
蠢く人の世界となるとても。

(八月二十二日)

黄の小花

夕暮野路を辿りて、黄に咲ける

160.

小花を摘めば、涙はせきあへず。

161

ああ、ああこの身この花、小さくも
いのちあり、また仰ぐに光あり。

この野に咲ける、この世に捨てられし、
運命よ、いづれ、大慈悲の
かくれて見えぬ恵みの業ならぬ。

よし我、黄なる花の如、
霜にたをるる時あるも、
再び、もらす事なき天の手にて
還るをうべき幸もてり。

ああこの花の心を解くあらば
我が心また解きうべし。
心の花しひらきなば、
またひらくべし、見えざる園の門。

(八月二十二日)

君が花

君くれなるの花薔薇、
白絹かけてつつめども、
色はほのかに透きにけり。
いかにやせむとまどひつつ、

162

墨染衣袖かへし
掩へどもくいや高く
花の香りは溢れけり。

163

ああ秘めがたき色なれば、
頬にいのちの血ぞ熱り、
つつみかねたる香りゆゑ
瞳に星の香も浮きて、
伴はりがたき戀心、
熄えぬ火盞の火の息に
君が花をば染めにけれ。

(九月五日夜)

波は消えつつ

波は消えつつ、碎けつつ
底なき海の底より湧き出でて、
朝より真昼、晝より夜に朝に
不斷の叫びあげつつ、帯の如、
この島根をば纏ふなり。

ああ詩人の興來の

波も、消えつつ、碎けつつ。

はかり知られぬ『秘密』の胸戸より、
劫風ともに千古の調にして、

不滅の教宣りつつ、勇ましく
人の心の岸には寄するかな。

(九月十二日夜)

柳

ああ君こそは、青淵の
流轉の波に影浮けて
しなやかに立つ柳なれ。

流轉よ、さなり流轉よ、それ遂に
夢ならず、また影ならず、
照る世の生日進み行く

生命の流れなればか、春の風
燻じて波も香にをどり、
ひと雨毎に梳づる
愛の小櫛の色にして、
見よ今、枝の新装、
青淵波もたのしげに
世は皆戀の深緑。

(九月十四日)

愛の路

高きに登り、眺むれば、
乾坤愛の路通ふ

166

青海原のはてにして、
安らかに行く白帆影。――
波は休まず、撓まずに
相噛みくだけ、動けども、
安らかに行く白帆影。

167

路のせまきに、せはしげに
蠢めく人よ、来て見よや、――
花を虐げ、景を埋め、
直なるみちをつくるとて、
狭き小暗き愁嘆の
牢獄に落ちし子よ、見よや、――

大海みちはなくして、縦横の
みちこそ開け、愛の路。

(九月十四日)

落ち志木の實

秋の日はやく母屋の屋根に入り、
ものさびれたる夕をただひとり
紙障をあけて、庭面にむかふ時、
庭は風なく、落葉の音もたえて、
いと静けさに、林檎の紅の實は
かすかに落ちぬ、波なき水潦。

168

夕のあはき光は箒目の
ただしき地に隈なくさまよひて、
猶暮れのこるみ空の心のみ
一きは明くうつせる水潦、
今色紅の木の實の落ち來しに
にはかに波の小渦立てたれど、
やがてはもとの安息うかべつつ、
再び空の心を宿しては、
その遠蒼き光に一粒の
りんごのあたり縁どりぬ。

169

ああこの小さき木の實よ、八百千歳、

かくこそ汝や静かに落ちにけむ。
またもも年の昔に、西人が
想ひに耽る庭にとおとなひて、
尊とき神の力の一鎖、
かくこそ落ちて、彼には語りけめ。

我今人のこの世のはかなさに
つらさに泣きて、運命の遠き路、
いづこへ、若きかよはきこのむくる
運ばむものと秘かに惑へりき。
落ちぬる汝を眺めて、我はまた、
辛からず、はたはかなき影ならぬ

たふとき神の力の世をば知る。

汝何故にかくまで静けきぞ、――
人はみづから運命に足りかねて、
さびしき廣みはてなき暗の野の
躓きにがき悲哀の實を喰むに、
何故汝のかくまで安けきぞ、――
足るある如く、落ちては動かずに
心に何か深くも信頼る如。

夜の歩みは漸く迫り来て、
羽弱か、群に後れし夕鴉

寂ある聲に友呼ぶ高啼きや、
水面にうきしみ空の明るみも
消えては、せまきわが庭黝みぬ。
ああこの暗の吐息のたゞ中よ、
灯ともす事も、我をも忘れては、
よみがへりくる心の光もて
か黒き土のさまなる木の實をば
打眺めつつ、静かに踟躇く。

(九月十九日夜)

秋 密

花蠟もゆる御簾の影、

172.

琴柱をちいて少女子の
小指やはらにしなやかに、
絃より絃に轉ずれば、
さばしり出る幻の
人酔はしめの樂の宮、
ああこの宮を秘め置きて
とこあらたなる琴の胸、
秘密ならずと誰か云ふ。

173

八千年人の手に染まぬ
神の世界の大胸に
深くするどくおごそかに

我が目うつれば、ちよろづの
詩は珠なし清水なし、
光の川と溢れくる。
ああこの水の美しく、
休む事なく湧き出るを
秘密なりとは誰か知る。

(九月十九日夜)

あゆみ

始めなく、また終りなき
時を刻むと、柱なる
時計の針はひびき行け。

174

せまく、短かく、過ぎやすき
いのち刻むと、わが足は
ひねもす路を歩むかも。

(九月十九日夜)

『秋風高歌』畢

175

涙の曲

水緩やかに、白雲の
影をうかべて、野を劃る
川を隔てて、西東、
西の館やかたにほひ髪

あてなる姫の歌絶えず、
東の岸の草蔭に
牧の子ひとり住ひけり。

姫が姿は、弱肩に
波うつ髪の緑なる
雲を被きて、白龍の
天の階ふむ天津女が
羽衣ぬげるたたずまひ。
牧の子が笛、それ、野邊の
白き羊がうら若き
瞳をあげて大天の

圓らの夢にあこがるる
おもひ無垢なる調なりき。

されども川の西東、
水の碧の胸にして、
月は東に、日は西に
立ちならびたる姿をば
静かに宿す時あれど、
二人が瞳、ひと日だに
相逢ふ事はなかりけり。
ふたりが瞳ひと日だに

あひぬる事はあらざれど、

小窓、櫻の花心地

春日、燠ずる西の岸、

とある日、姫が紫の

とばりかかげて立たす時、

緑草野の丘遠く

いとも和らに、たのしげに

春の心のただよひて、

糸遊なびく野を西へ、

水面をこえて浮びくる

牧の子が笛聞きしより、

何かも胸に影遠き

むかしの夢の仄かにも

おとづれ來らむ思ひにて、

晝はひねもす、日を又日、

姫があてなる俤は、

廣野みどりのあめつちを

梓のやうなる浮彫と、

やかたの窓に立たしけり。

また、夕されの露の路、

羊を追ふて牧の子が

草の香深き岸の舎に

かへり來ぬれば、かすかにも

薄光さす川面に

さまよひわたる歌聲の

美し夢に魂ひかれ、

ただ何となくその歌の

主を戀しみ、獨木舟、

朽木の杭に纜を

解きて、夜ななく牧の子は

西の岸にと漕ぎ行きぬ。

ああ、ああされど日を又夜、

ふたりが睡、ひとたびも

相あふ時はあらざりき。

姫が思ひはただ遠き

晝の野わたるたえくの

笛のしらべの心にて、

牧の子が戀、それやはた、

帳ゆらめく窓洩れて

灯影とともにゆらぎくる

清しき歌の心のみ。

姫は夢見ぬ、かの野邊の

しらべぞ、夜半のわが歌の

天よりかへる反響なれ。』

また夢見けり、牧の子も、

『かの夜なくの歌こそは、
白^ま晝^{ひら}わが吹く小角^{こかく}の音の
地心^{ちしん}に泌^{しみ}みし遺韻^{いじゆん}よ。』と。

牧の子は野にいと細き
希望^{のぞみ}の節の笛を吹き、
姫はさびしく、紫の
とばりを深み、夜半^{よま}の窓、
人なつかしのあこがれの
柔^なき歌聲うるませて、
かくて日毎に姫が目は
牧野^{まきの}にわしり、夜なくに

牧の子が漕ぐうつる舟
西なる岸につながれて、
櫻花散る行春^{ゆはる}や、
行きて、いのちの狂ひ火の
狂^はふ焔^{ほむ}の深緑^{ふかみどり}、
ただ燃えさかる夏の風
野こえてここにみまひけり。

ああ夏なれば、日ざかりの
光にさほふ野の羊、
草踏み亂し、埒^らを超え、
泉の縁^{ほとり}のたはぶれに

鞭ををそれぬこをどりや、
西の岸にも、葉櫻に、
南蠻鳥は眞夏鳥、
来て啼く歌は、かがやかの
生ける幻誘ふ如、
ふる里とほき南の
燃えにぞ燃ゆる戀の曲、
照る羽つくるひ、瞳をあけて、
のみど高らに傳ふれど、
さびしや、二人、日を又夜、
相見る時はあらざりき。
胸に渦巻くいのちの火

その焔にぞ燬かれつつ、
ああ燬かれつつ、かくて猶、
捉へがたなき夢追ふて、
水ゆるやかの大川の
(隔てよ、さあれ浮橋の)
西と東に、はかなくも
影に似る戀つながれぬ。

夏また行きぬ。かくて猶、
ああ夢遠きあこがれや、
はかなき戀はつながれぬ。
牧野の草に、『秋』はまづ